

信頼できるデータが企業成長を加速！

～Data Driven基盤構築戦略～

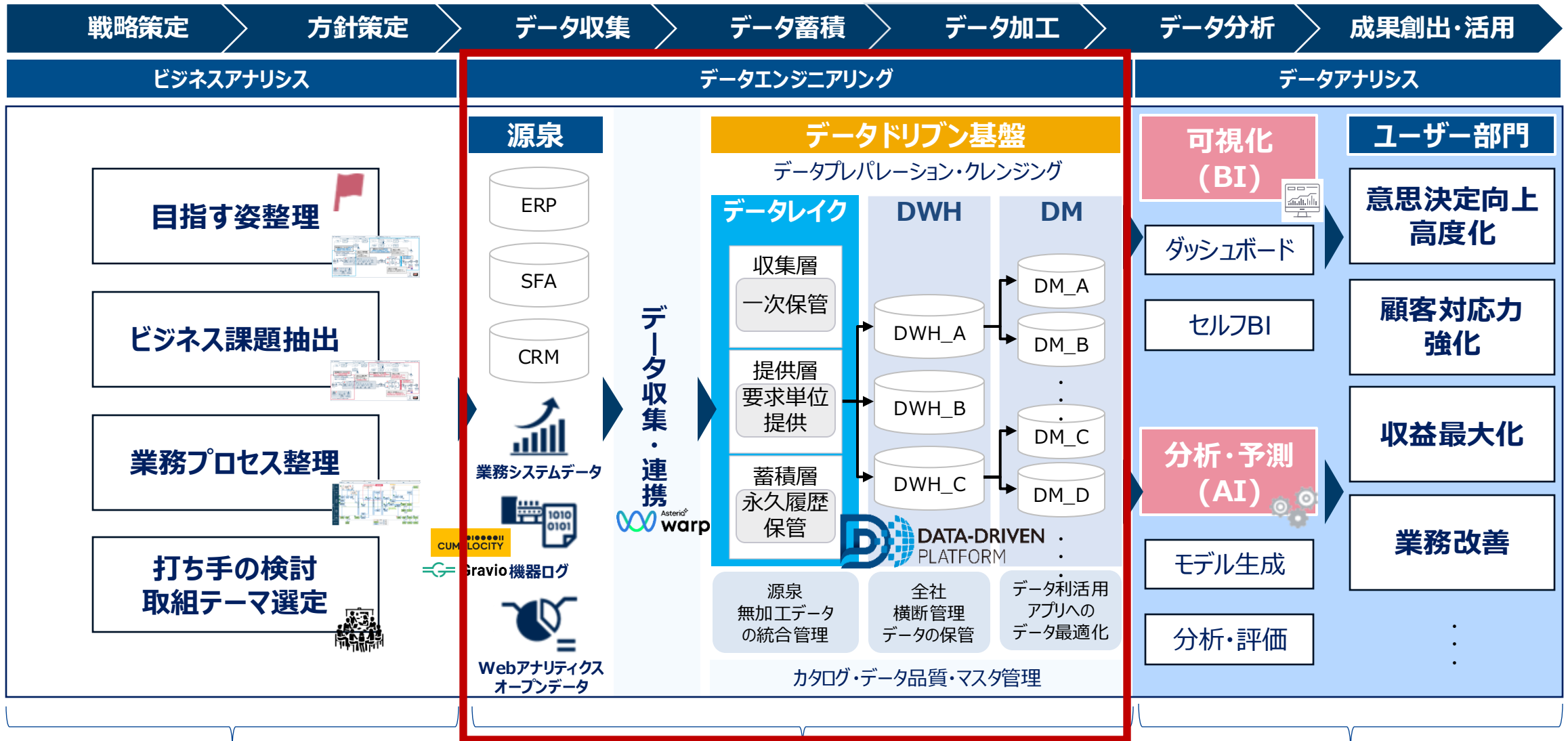
2026年2月25日

パナソニックインフォメーションシステムズ株式会社

データ&アナリティクスソリューション本部 アナリティクスプラットフォーム事業部

北村 拓朗





セッション 1

セッション 2

セッション 3

今日、お持ち帰りいただきたいこと

1

データ基盤 = 経営インフラ

単なるIT投資ではなく、経営の意思決定を支えるインフラである

2

止まる理由は「3つ」の要素

IT基盤だけでも、人だけでも、文化だけでもなく、3つが並列に影響し合っている

3

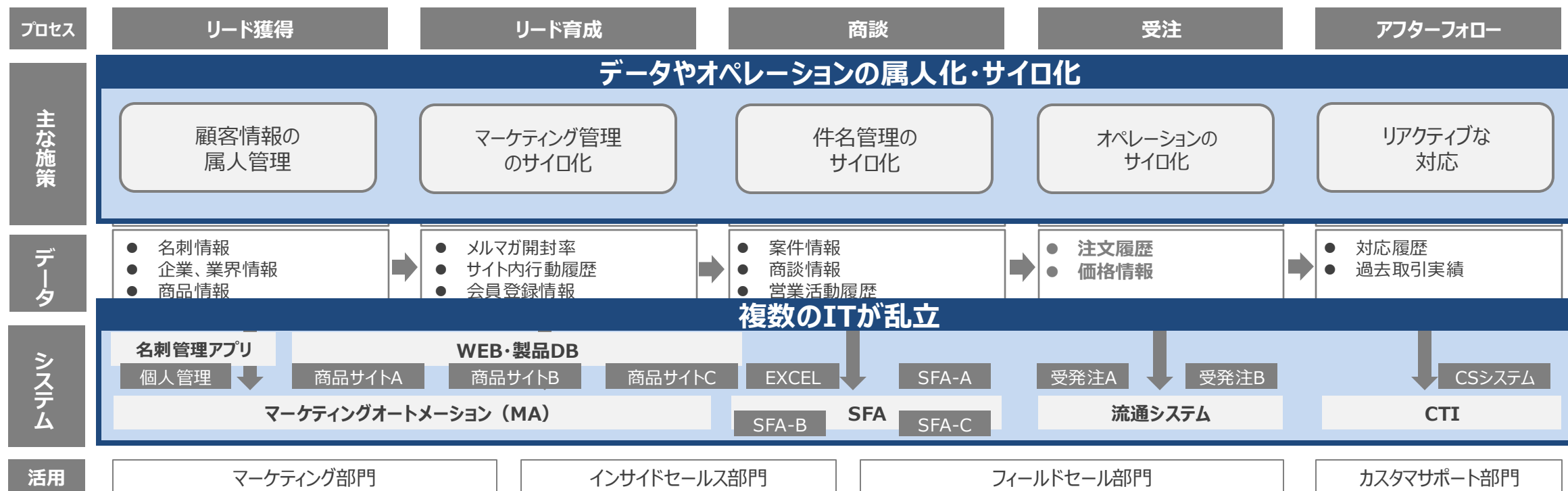
基盤設計の軸は SSOT と論理統合

「使われ続けること」を前提に、SSOTと論理統合を軸に設計する

この3点だけ押さえていただければ、今日の30分は成功です

ITの乱立・サイロ化 —— 典型的な課題の実態

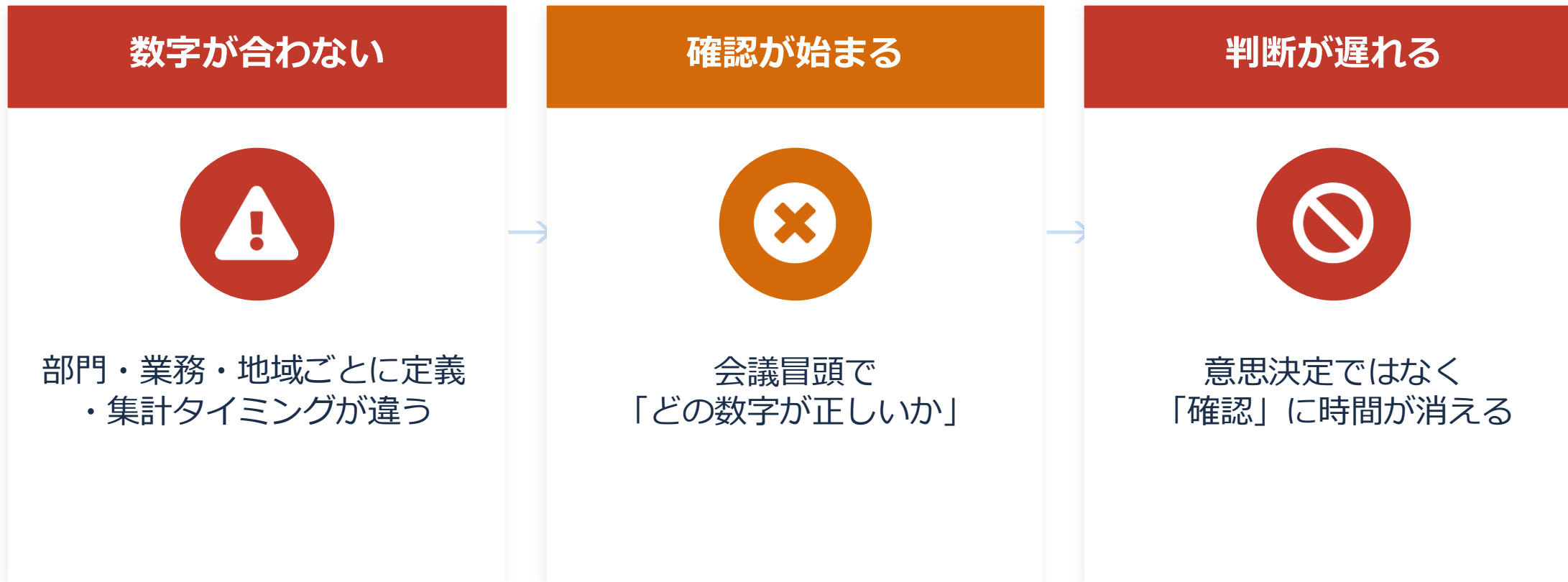
各部門のニーズ・都合によりITシステムが乱立 —— 属人化・サイロ化が進む



社内にデータだけは大量にある —— しかし効率的な利活用が全くできていない

これは例外的なケースではなく、似たような状況があちこちで見受けられる「構造的な課題」

基盤が弱いと —— 経営現場で何が起きるか



現場：数字合わせに時間・エネルギーを消費 / 経営：確証のないまま判断を迫られる —— 二重のコスト

 現場が頑張っても確証が持てない —— 経営が自信を持って判断できない状態が続く

ただし、データ基盤があるだけでは成果は出ない

基盤は「必要条件」ではあるが「十分条件」ではない



基盤はある。でも使われない



DWHを構築した



BIツールも導入した



でも現場が使わない



ダッシュボードはある。でも変わらない



画面はある



データも正しい



でも会議の運用が変わらない



分析できる人はいる。でも広がらない



一部の人は使える



「いつもの人」だけが見る



結果として属人化

基盤整備が「作って終わり」にならないために —— では、何が足りないのか？

データ活用は「3つの柱」で成り立つ



3つは並列要因 —— どれが欠けても止まる。直列ではなく、同時に噛み合うことが条件

カルチャーの変革



Data Culture

業務や経営意思決定のプロセスにおいてデータを重視するマインドや行動が根付いている状態

カルチャーと人材

データ活用への経営層の直接関与

未来を予測するデータ活用へステージを変える

オペレーティング・モデルの変革



Data Literacy

ツールを利用してデータの可視化や分析を行える基本スキル・知識を誰もが有する状態

組織間連携

共通の活用スキームやプラットフォームの重要性

データ活用・分析における目的の明確化

ITの変革



Data Management & Infrastructure

常に必要最大限のデータが蓄積され、利用者にそれらの所在・意義が公開され、スピーディにデータの取り出しが可能な状態

データ
マネジメント

プロセスの標準化とMDMの重要性

SSOT (Single Source of Truth)

データオーナー・データスチュワードの定義

組織間連携

共通の活用スキーム・プラットフォームの重要性

三つが同時に噛み合ったときにだけ、データ活用は回り続ける

ここからのご説明内容：IT変革（データ基盤）



Data **Culture**



Data **Literacy**



Data Management
& Infrastructure

今日のメインピック

「基盤だけが大事」と言いたいではありません。

今日は、三つの柱のうち、私が責任を持つ領域を整理します。

今日カバーする内容：



SSOTとは何か



論理統合とはどういう設計か



基盤が担うべき役割

基盤の役割を一言で言うと



「正しいデータを、同じ定義で、
必要な人が、必要なタイミングで、
迷わず使える状態にすること」

NOT

高度な分析そのもの



BUT

意思決定の前提を揃えること

NOT

データを増やすこと



BUT

信頼できる1つの数字を確立すること

前提が揃って初めて、文化もリテラシーも成果に変わる

SSOT —— 唯一正しいデータを確立する

SSOT = Single Source of Truth

SSOT がない状態

- ❌ 「売上」の定義がバラバラ
- ❌ 会議に持ち込む数字が部門ごとに違う
- ❌ 議論は必ず「正しさの確認」に戻る
- ❌ データが増えるほど混乱が増す



SSOT がある状態

- ✅ 全社で「この数字」が共通認識
- ✅ 会議冒頭の確認がなくなる
- ✅ 議論が「なぜ」「次に何を」に集中
- ✅ 経営が自信を持って言い切れる

ただし、定義を決めるだけでは不十分 —— 数値加工パイプラインの自動化が「確証」を生む

SSOT

"何を正しいとするか" の定義を揃える



自動化

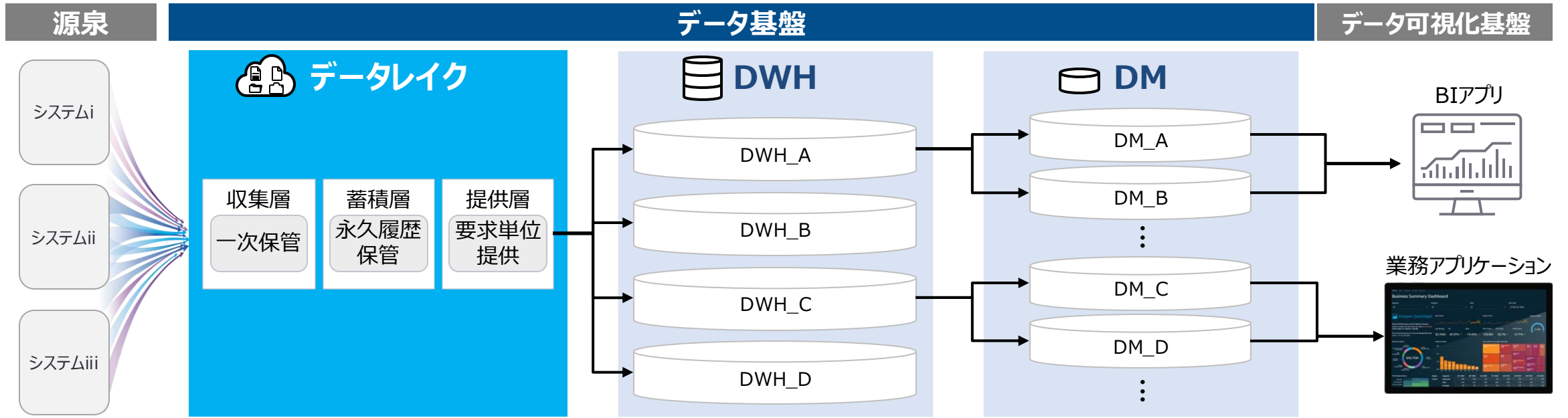
"定義通りに毎回正しく計算される" を仕組みで担保する

💡 二つが揃って初めて —— 「誰が・いつ見ても、同じ数字」が経営の確証になる

✓ SSOTの原則のもと、 「唯一正しいデータ」を一つの基盤に集約

SSOTとは？

→「Single Source of Truth（信頼できる唯一の情報源）」の略称。
信頼できるただ1つのソースを確立することで、情報の一貫性と正確性を確保し、組織内の全員が同じデータに基づいてビジネスの意思決定を行うことを保証するために使用される概念。



源泉無加工データの統合管理

保管可能なデータ形式の柔軟性や
保管コスト低減効果を評価し、
源泉アプリの様々なRAWデータを集約

全社横断管理データの保管

事業分社・統合化により分散した
各領域のデータを統合し、全社の
データ品質を向上

**データ利活用アプリへの
データ最適化**

データの利活用要件に最適な形に
データを加工・保管

論理統合 —— 物理的にバラバラでも経営からは一つ

Logical Integration —— 物理的に一つにしなくていい。経営からは一つに見える設計

なぜ物理統合ではなく論理統合か

- × 現場には多くの既存システムがある
- × 地域ごとに規制・制度が違う
- × IT側の都合で全部を一つの箱に → 失敗しやすい

→ だから



データカタログで「論理的に統合」

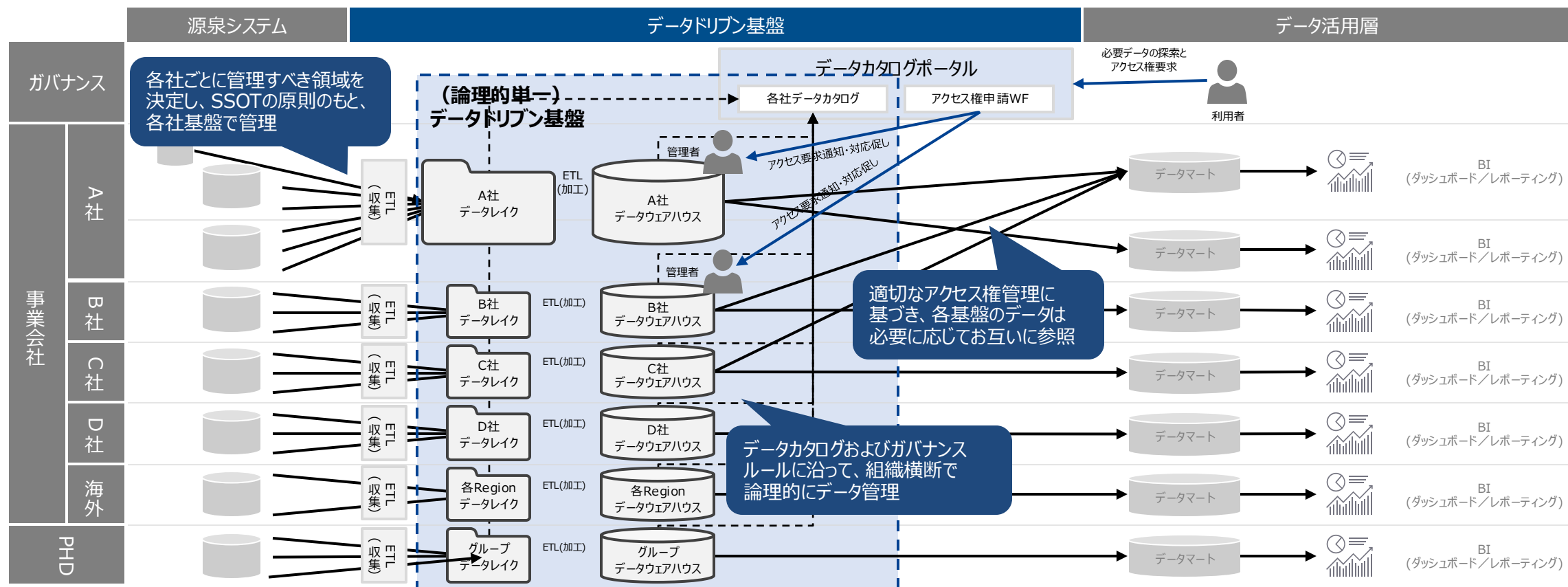
物理的には分かれていても、見え方は一つ

経営からの見え方

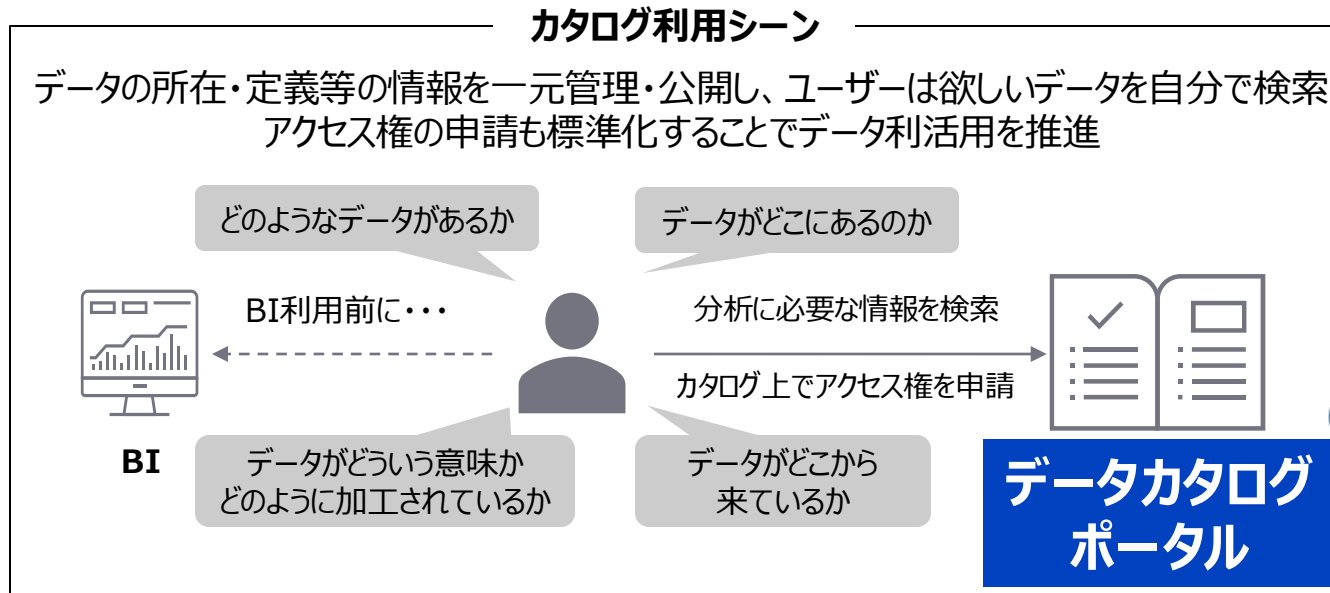


グローバル・分社環境で現実的に効くやり方

- ✓ IT部門側の都合で、無理に一つの環境に統合はしない
- ✓ データカタログで、基盤とデータを論理的に統合
- ✓ データのガバナンスを効かせる体制・プロセスを検討



データカタログで基盤に蓄積されたデータの所在・定義を統合管理し、公開する



Microsoft Purview

組織がデータ資産を管理、保護するのに役立つAzureの包括的なデータガバナンスソリューションであり、データカタログ機能、データリネージュ機能、アクセス権申請WF、データ利用状況レポート、データセキュリティ・ガバナンスリスク警告など様々な機能を併せ持つ

以下の要素を登録・公開するサイト

データの一覧

蓄積されているデータの一覧情報

データの所在

データがどこから発生し（データの出自）、どのように変化し（データの加工処理内容）、どこに格納されたか（データ格納先・提供先）の情報

データの意味

データの業務的・システム的な意味や状態を説明する情報

経理部門とも連携し、業務ユーザー視点で馴染みのあるビジネス用語・理解容易性を意識した説明文を付与

データドリブン基盤 データカタログ

- 組織名
 - 組織名
 - 組織名
 - ビジネスユーザー向けデータ
 - 生産-PSI
 - 財務会計**

管理見直し最新情報ビュー

スキーマ

用語集の用語

- pddrvn_glossary
- 勘定科目別
- 商品別
- 月次
- 組織別
- 見直し

列名	用語集の用語	データ型	列の説明
ND	年度	nvarchar	集計年度
CATEGORY	業務カテゴリ	nvarchar	集計業務カテゴリ(前年実績・計画・〇月見直し等)
TIME	期間	nvarchar	期間コード
DATASRC	データ種類	nvarchar	データ種類(IFRS調整後を示す1種のみ)
ENTITY	組織	nvarchar	組織コード
ACCOUNT	勘定科目	nvarchar	勘定科目コード
INTCO	相手先	nvarchar	相手先コード(特定の相手を示さないALL_INTCO1種のみ)
INPCURR	入力通貨	nvarchar	入力通貨コード(特定の通貨を示さないTOTAL_CURR1種のみ)
RPTCURR	換算後通貨	nvarchar	換算後通貨コード(JPY[日本円]、LC[現地通貨]、JPY_LYEAR[前年レート]、JPY_BPALN[計画レート]の4種)
PRODUCT	商品カテゴリ	nvarchar	商品カテゴリ(特定の商品を示さないALL_PRODUCT1種のみ)
NUMDATA	数値データ	decimal	数値(金額・人員)
BCO_NM	分社名	nvarchar	分社名(マスタにより組織コードを補足)
J_NM	事業部名	nvarchar	事業部名(マスタにより組織コードを補足)
BU_NM	BU名	nvarchar	BU名(マスタにより組織コードを補足)
HIN_NM	商品名	nvarchar	商品名(マスタにより組織コードを補足)
EVANET_NM	EVA-Net名称	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
ME	名称	nvarchar	拠点名称(Eva-Net名称や書式を調整・補足したもの)。拠点名称は本項目をご確認ください。
INPT_KYN_NM	入力通貨	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
LCTN_NM	所在地名	nvarchar	所在地名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
CNTY_NM	国名	nvarchar	国名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
KMK_BRI_NM	科目分類名	nvarchar	科目分類名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_NM	勘定科目名	nvarchar	勘定科目名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM1	勘定科目詳細①	nvarchar	勘定科目詳細①(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM2	勘定科目詳細②	nvarchar	勘定科目詳細②(マスタにより勘定科目コードを補足)

BI・AI双方のニーズを満たす、唯一のデータ基盤

① 品質の一元保証

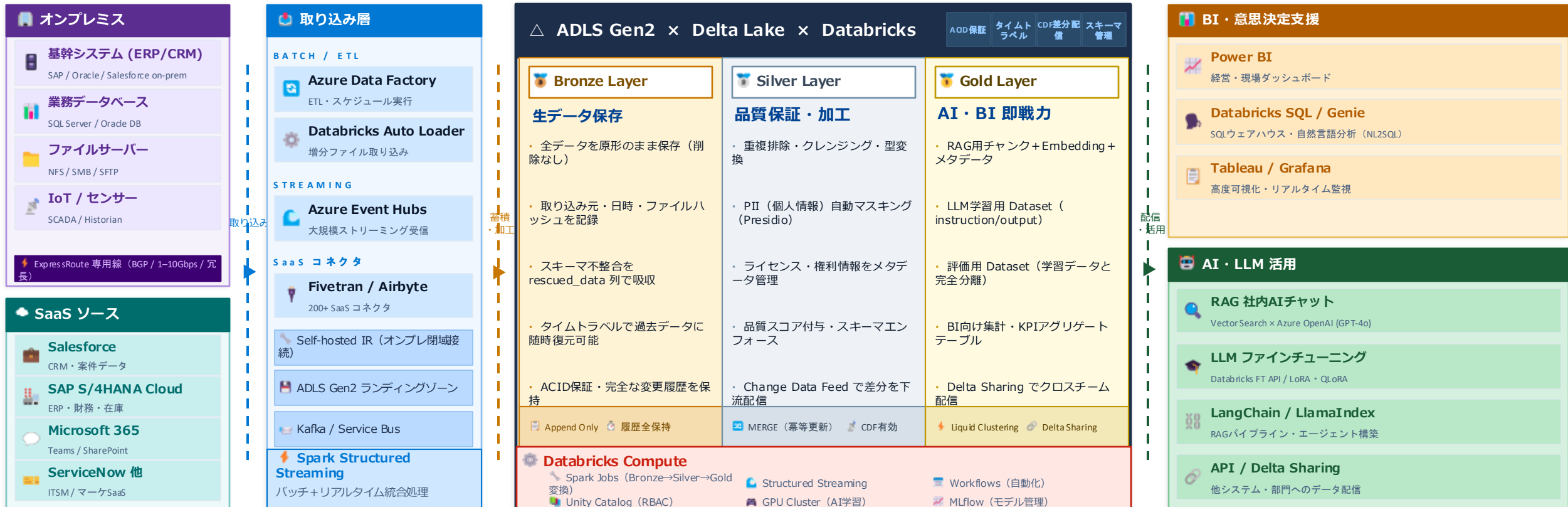
Silver層のクレンジング/スキーマ管理/品質スコアリングがBI正確性とAIの精度を同時担保

② 鮮度の自動維持

Change Data Feedの差分更新でダッシュボードとRAGインデックスを常に最新化

③ ガバナンスの内包

Unity Catalog/RBAC/データリネージで「使えるデータ」「守られたデータ」両立



会議が変わる — Before / After

観点	BEFORE	AFTER
会議冒頭	各現場が事前に必死に数字を合わせる 会議では確証のない数字が並ぶ	定義通りに自動集計された数字が揃う 全員が同じ前提から議論を始める
議論の中身	「次回までに確認します」で終わる 本質的な判断が先送りに	「なぜこうなったか」 「次に何を打つか」に集中
経営の時間	確認コスト・すり合わせコストが高い 判断のスピードが落ちる	前提が揃っている状態で議論 意思決定のスピードが上がる



この左右の差を生むのは設計の思想。SSOT・パイプライン自動化・論理統合が揃って、会議が、そして組織が変わる

今日のまとめ —— 持ち帰り3点

1



止まる理由は「3つ」の要素

人・文化・IT基盤のどれか一つではなく、三つが並列で影響し合っている

2



基盤が担うのは「前提を揃えること」

分析することではなく、意思決定の前提を揃えることが基盤の価値

3

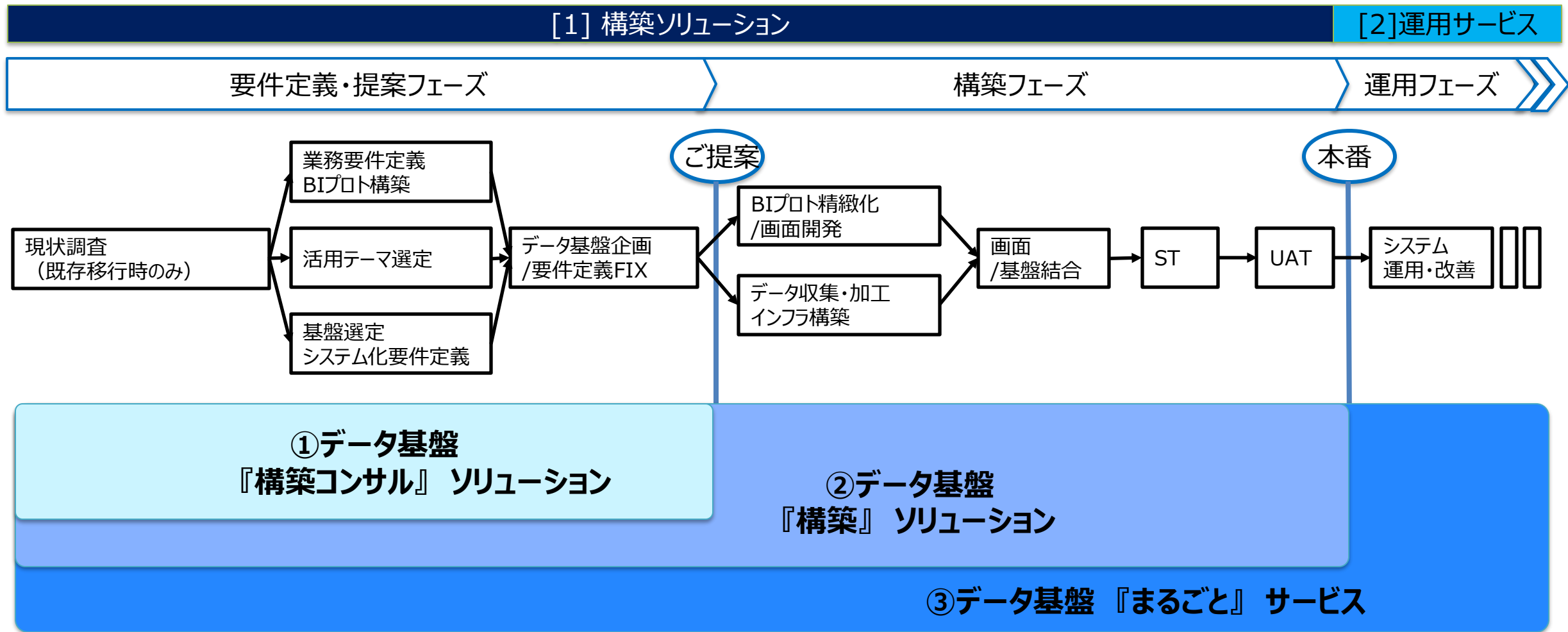


前提を揃える鍵は SSOT と論理統合

「この数字で判断する」と言い切れる状態と、物理的バラバラを論理的に一つにする設計

データ活用は「作って終わり」ではなく、「回り続ける取り組み」として設計できるようになります

データ基盤企画/開発/運用/改善をワンストップでご支援





Panasonic